

「7階エレベーター無しに住む橋本」

北浦 勝大

## 登場人物

橋本太助 (33)	保険会社営業事務、 7階の住人
川畑唯 (32)	橋本の同僚
島田守 (49)	工事現場作業員、 6階の住人
水谷春 (32)	橋本・川畑の同僚
川畑美保 (61)	川畑の母。鹿兒島在住
成川勉 (33)	証券会社営業
田村孝弘 (35)	不動産会社営業
市沢一郎 (50)	マンションの管理人、 1階の住人
住人A (40)	主婦、3階の住人
住人B (27)	男性、会社員、4階の住人
上司 (55)	橋本の上司
配達員 (30)	
サラリーマンA (45)	
現場監督 (40)	工事現場の監督
作業員A (40)	引越し業者
作業員B (22)	引越し業者

○ 保険会社オフィス（夕）

夏。

クールビズ姿で働く社員達。

時計が17時半を指し、終業のチ

ヤイムが鳴る。

働き続ける社員たちの中、一人テ

キパキ片付け、リュックを背負う

男、橋本太助（33）。

ホワイトボードのネームプレート

を裏返し、足早にオフィスを出る。

裏返したネームプレートには、

『橋本』

○ 一軒家の前（夜）

住宅街。

一軒家に入って行く仕事終わりの

サラリーマンA（45）。

前を通り過ぎる橋本。

○ マンションA・エントランス（夜）

エレベーターを待っている親子。  
7階まで記された、エレベーター  
の階数表示。

○同・前々サンライズコーポ府中の前（夜）

外から、エレベーターを待つ親子  
が見える。

前を通り過ぎる橋本。

向かう先、隣にある年季の入った  
マンション。

その名も『サンライズコーポ府中』  
橋本、入って行く。

街灯が外壁を照らしている。

マンションAと高さがほぼ同じだ。  
『入居者募集中』の垂れ幕。

○サンライズコーポ府中・エントランス（夜）

『701』の郵便受け。  
を開ける橋本。

階段から降りて来るウーバーイーター  
配達員（男性・30）、  
配達員「（息を切らし）あーくそっ（と出て行く）」

橋本、郵便受けを閉め、歩き出す。  
向かうは階段――  
上り始める。

○同・2階（夜）

溜息混じりの住人A（女性・40）、エコバッグ片手に、3階から降りて来る。  
上ってきた橋本とすれ違う。  
橋本、平然とした表情で3階へ。

○同・3階（夜）

上って来る橋本、4階へ。

○同・4階までの階段（夜）

スーツ姿の住人B（男性・27）、

息を切らし、上っている。

後ろから橋本、悠々と追い越す。

○同・4階（夜）

『4／7』（壁に記された階数）。

上ってくる橋本、5階へ。

と、行く手を阻むように寝ている、

作業着姿の島田守（49）。

手にはカップ酒。

橋本「（肩を叩き）島田さん」

島田「（朦朧と）ん。ああ、はしもっちゃん」

橋本「ほら、あと2階、頑張ってください」

島田「ん、あんがとあんがと（とまた寝る）」

橋本「おうちが待ってますよ」

○同・7階（夜）

玄関前に置き配された夕食。

橋本、それ手に取り部屋の中へ。

『701』の錆びたプレート。

○同・外観（夜）

7階建て、そびえたつサンライズ  
コーポ府中。

タイトル『7階エレベーター無しに住む橋本』

○同・前（日替わり・朝）

管理人の市沢一郎（50）、歩道  
で水打ち。

マンションから出てくるスーツ姿  
の橋本。

手にはゴミ袋。

橋本「おはようございます」

市沢「お。いってらしゃい」

橋本、ゴミ捨て場に置き、会社へ。

すぐに収集車が到着し、回収。

マンションから急いで出てくる、

寝起きの島田。

両手いっぱい大きなゴミ袋。

市沢「島田さん。もう遅いよ」

島田「ええー？」

市沢「（無言で島田を見たまま）」

島田「……だめ？」

市沢「ダメ」

島田「……。持ってくるの大変なんだよ！？」

市沢、無視して水打ち再開。

島田、諦めてマンションへ撤退。

○保険会社オフィス

デスクに着いている橋本、パソコン越しに、向こう側をチラチラ。

視線の先、愛想の良い笑顔で資料を受け取る川畑唯（32）。

視線に気づく川畑。

橋本、咄嗟に目を逸らし、ドギマ

ギと作業再開。

× × ×

時計が17時半を指す。

橋本、テキパキと片付け始める。

川畑「お疲れ様でしたー（と足早に退社）」

橋本、急いで後を追う。



○同・エレベーターホール（夕）

川畑、スマートフォンをいじりながら、エレベーターを待っている。

橋本「（後ろから来て）早いですね」

川畑、笑って相槌を打ち、携帯をいじる。

橋本「（会話を続けられず）」

○サンライズコーポ府中・4階（夜）

島田、泥酔し寝ている。

階段を上ってくる橋本。

橋本「（肩を叩き）島田さん起きてください」

島田「（寝ぼけて）おお、はしもっちゃん」

橋本「相談があります」

島田「ん。（嬉しそうに）なによお」

橋本「気になる女性には、どう声を掛ければいいと思いますか」

島田「ええ？（得意げに）男なら、ビシーっ  
といっっちゃえばいいのよ。ビシーっと」

橋本「びしつと」

島田、寝ている。

橋本、びしつと、と呟きながら上  
っていく。

○バー（夜）

しわ一つないスーツ姿の成川勉

（33）が座っている。

成川「（自信に満ちた笑顔で）こないだの返

事、聞かせてもらってもいいかな」

隣に座っているのは、川畑。

川畑「（考えて）」

成川「いいよ、ゆっくりで」

川畑「……ちよっとまだ……」

成川「（眉をぴくつかせ）そっかそっか」

川畑「……」

成川「（じれったい）」

川畑「（俯いて）すみません」

成川「……（立ち上がり）もう一軒行こうよ」

○橋本の部屋・ベランダ（夜）

広がる夜景。

○同・中（夜）

整頓された広い室内（2DK）。

男性の声「この夜景を、君とまた一緒に」

それはテレビドラマ（配信）のワ  
ンシーン。

テレビの中、夜景の見える丘で男  
性が告白中。

橋本、真剣な表情で観ている。

テレビに映る女性「……はい、喜んで」

と、一時停止。

巻き戻しをして、同じシーンを再  
度観る。

○保険会社オフィス・女子トイレ（日替わり）

水谷「また保留!？」

鏡に顔を近づけ、化粧直しをして  
いる水谷春（32）。

隣に川畑。

水谷「何にそんな引つかかってんの？」

川畑「んー、なんていうか……」

個室から出てきた新入社員、川畑  
らに並んで手を洗う。

気まずそうに黙る川畑。

新入社員、お疲れさまでーす、と  
出て行く。

水谷「（化粧を続けながら）あの子と私達に  
は大きな差があります。なんでしょー」

川畑「なに」

水谷「余裕。こうして私らがトイレにいる分  
だけ、あの子はシャバに出てんの」

川畑「シャバ？」

○同・エレベーターホール（夕）

仕事終わりの川畑、エレベーター  
に乗り込み、扉が閉まる。

駆け足で来る橋本（間に合わず）。

○川畑の部屋・リビング（夜）

1 Kの室内。

テレビ台の上に、試供品の化粧水等が大量に散らばっている（整頓されていない）。

テーブルに置かれた携帯電話、スピーカーで『川畑美保』（川畑母・61）と繋がっている。

川畑母「（オフ）もうね、あんただってもう若くないんだから」

バスタオルを頭に巻き、顔パック姿の川畑。キッチンから芋焼酎とグラスを持って来る。

川畑母「（オフ）あれよ？ お母さんはね、あの、できちゃった婚？でもいいんよ？」

川畑「（座って）何言ってるのよ。もう切るよ（と切る）」

テレビ画面に反射して映る川畑。つまらなそうに焼酎をすすっている。

川畑「（映る自分をジッと見て）」

○保険会社オフィス（日替わり）

資料を抱え、歩く川畑。

橋本の声「川畑さん」

振り向くと、そこには橋本。

橋本「それ、人事部まで、ですよね」

川畑「あ、はい」

橋本「僕、行きますよ」

川畑「え？」

橋本「行きます」

川畑「いや」

橋本「ついでなんで」

川畑「じゃあ……お願いします（と渡す）」

受け取る橋本。

川畑、橋本の左手を見やる。

薬指に指輪はない。

川畑「あ」

橋本「？」

川畑「あいえ、ありがとうございます」

○居酒屋A（夜）

会社の飲み会。

ビール、ハイボール、と一杯目の注文をまとめる中、

川畑「じゃあ私も（と他に合わせる）」

橋本「（手を上げ）梅しそサワーで」

橋本だけ違う注文。

他社員、梅しそサワーひとつ、と呼応し店員へ伝わっていく。

川畑、橋本を見ると。

割箸袋で箸置きを作っている。

× × ×

新入社員を中心に盛り上っている。

端の席に、橋本と川畑。

店員が橋本に梅しそサワーを持ってくる。

川畑「いつもそれなんですか？」

橋本「（ぎこちなく）はい。基本的に」

と箸を自作箸置きへ。

川畑「なんか、橋本さんって変わってますね」

橋本「それは」

川畑「あ、良い意味です」

橋本「はあ」

川畑「何か趣味とかあるんですか？」

橋本「（考えて）植物育ててます。あと家庭

菜園とか」

川畑「ご結婚されてるんですけどっけ」

橋本「一人です」

川畑「へー」

橋本「なんでですか？」

川畑「（笑って誤魔化し）どんなの育ててる  
んですか？」

橋本「（携帯を手に取り、画面を見せ）こんな  
感じで色々と。これウンベラータって  
いうんですけど、大きくなったら枝分し  
て（と話し続ける）」

川畑、真剣に話す橋本の横顔を見  
やる。



橋本「最初は一つだったのが、これとかは8  
本目で」

川畑「そんなに！？」

橋本「まあ。他にもトマトとかしそとかあつて。それ使って梅しそサワー作ったり」

川畑「えーすごい。（画像を覗き込み）てか、  
景色良いですね」

橋本「まあ7階なんで」

川畑の携帯電話が鳴っている。

○同・廊下（夜）

電話をしている川畑。

川畑「いま飲み会なんよ」

川畑母「（オフ、嬉しそうに）あらそうなん。  
いいじゃないの〜」

川畑「なに」

川畑母「（オフ）いやあのね、お母さん来週  
唯のとこ行こうかなあつて」

川畑「来週！？」

川畑母「（オフ）でもいいの。また連絡するから。飲み会楽しんでね（と切れる）」

川畑「……なんで嬉しそうなのよ……」

川畑、戻ろうと席へ向かう。

席では、周りの喧騒を気にせず、  
険しい顔でメニューを吟味している橋本。

橋本「（突然手を挙げ）もろこし揚げ一つください！」

川畑、小さく笑う。

○同・外（夜）

二次会へ向かう社員一同。

水谷、川畑の元へ。

水谷「まじ疲れた。帰ろ（と駅方面へ）」

川畑「ああ、うん（と辺りを見回し）」

橋本の姿を見つける。

橋本、二次会方面でも駅でもない  
方向へ歩き出す。

川畑「（水谷へ）ごめん！ 先帰ってて！」

と橋本の元へ。

川畑「橋本さん」

橋本「（振り返り、驚いて）はい」

川畑「どこか行くんですか？」

橋本「（緊張した様子で）帰ります。家こつ

ちなんで」

川畑「あ、そうだったんですね」

橋本「はい。ここから歩いてすぐで」

沈黙。

川畑「……なんかすみません、お休みなさい

（と戻っていく）」

遠くなっていく川畑の後ろ姿。

橋本「あ……。あの！」

○居酒屋B・前（夜）

満席です、と店員。

会釈をして、歩き出す橋本と川畑。

川畑「どこも空いてないですね」

橋本「（辺りを見て）他には……」

川畑「んー……」

橋本「……また今度の方がいいですかね」

川畑「（小さく）あの、自家製の梅しそサワ  
ーでしたっけ……」

橋本「はい」

川畑「おいしい、ですか？」

橋本「そりゃあもう、おいしいですよ」

川畑「……飲んでみたいかも、です」

橋本「え？」

川畑「まだ時間ありますし、もし良ければ、

一杯どうかなって……」

息をのむ橋本。

○府中けやき並木通り（夜）

イルミネーションが続く道。

その中を歩く、橋本と川畑。

川畑「橋本さんって結婚とか考えてますか？」

橋本「（驚いて）え。えっと、それはどうい

う意味で……」

川畑「（笑って）聞いただけですよ」

橋本「（緊張した面持ちで）」

○サンライズコーポ府中・前（夜）

橋本と川畑、到着。

橋本「ここです」

視線の先、7階建てのそびえたつ

サンライズコーポ府中。

川畑「あ、あそこに大きな植物が見えます」

橋本「あれがうちです」

川畑「見晴らし良さそうですね」

橋本「天気が良いければ、富士山も見えます」

川畑「富士山ですか？」

橋本「今日の朝も、ぼつちり見えて」

川畑「えー、すごい」

橋本「行きますか」

マンションへ入っていく二人。

○同・エントランス（夜）

郵便受けを開けている橋本。

川畑、辺りを見回している。

橋本「（閉めて）行きましよう」

川畑「はい（とついで行く）」

橋本が歩く先には、階段。

橋本、上り始める――

立ち止まる川畑、辺りを見回す。

川畑「（エレベーターは？）」

橋本の声「こっちですよ！」

どンドン上っていく橋本の足音。

川畑「（どういうこと？）」

○同・2階までの階段（夜）

階段を上る川畑、不審な表情に変

わっていく。

川畑「階段なんですか？」

橋本「（終始機嫌良く）そうです」

川畑「エレベーターじゃないんですか？」

橋本「はい」

川畑の足元、きついヒール。

どンドン上る橋本、階段を折返し、

川畑の視界から消えていく。

川畑「あの！ さつき外から見えたところです  
よね！」

橋本の声「植物がたくさんあったところです！  
川畑「あそこ！ 7階ですよね！」

橋本の声「はい！ 天気が良いければ、富士山  
が見えます！ 昨日の朝も見えました！」

淡々と上る橋本の足音。

川畑、事態が呑み込めない。

○同・3階（夜）

息を切らしている川畑、3階へ。

ヒールで足元が辛い。

手持ちバッグが体力を削る。

橋本の姿はもはや見えず、足音だ  
けが聞こえてくる。

川畑「橋本さん！エレベーターないんです  
か！」

橋本の声「はい！ あと4階です！」

○同・4階（夜）

川畑、膝を押して、どうにか4階へ上がってくる。

川畑「（息を切らして）」

橋本の声「島田さん、おうちが待ってますよ」

川畑、声に反応して前を見る。

そこには、カップ酒片手に寝ている島田。

そして、島田の肩を叩き話しかけている橋本。

島田「（眠そうに）おお、はしもっちゃん」

何やら会話を始める二人。

慣れた様子の橋本。

島田「（川畑に気づき、橋本へ）お、珍しい

じゃないのお」

橋本「（照れて）いえいえそんな」

島田「へへへ」

川畑「……」

橋本、振り返り、

橋本「（笑顔で）行きましょう」

川畑「帰ります」



橋本「え？」

川畑、翻し、足早に階段を降りていく。

橋本「川畑さん！？」

川畑の声「（足音共に）ごめんなさい！」

橋本「……？（と島田を見ると）」

ぐっすり寝ている。

○橋本の部屋・中（夜）

橋本、テレビを観ている。

橋本「（集中できない）」

○サンライズコーポ府中・4階（夜）

降りて来る橋本。

島田、まだ寝ている。

橋本「島田さん（と肩を揺らす）」

島田、寝たまま。

橋本「（肩を揺らし）あの、さっき僕何か変なことしてましたか」

島田「（寝ぼけて）んもう（と振りほどく）」

橋本「島田さん」

島田「（朦朧と）こんなとこ住んでる奴あな  
あ、誰にも相手にやされねえの。そーい  
うもんなの！（と寝る）」

橋本「……」

○保険会社オフィス（日替わり）

デスクに着いている橋本。

視線の先、仕事をしている川畑。

目が合わない。

意を決した橋本、川畑の元へ。

橋本「川畑さん」

川畑「ごめんなさい（と席を立つ）」

橋本、取り残される。

○不動産屋の前（夕）

仕事終りの橋本、窓に張られた賃

貸物件チラシを見ている。

橋本「（真剣）」

島田の声「（横から）はしもっちゃん？」

今日も作業着姿の島田。

島田「え、なに、ひっこしちゃうの」

橋本「あそこに住むのって、おかしいことな

んですよね」

島田「なんだよお、いきなり」

橋本「昨日島田さんが言っていました」

島田「んなこと言ったかな」

橋本、ジッと島田の言葉を待つ。

島田「（不機嫌そうになり）ま、そうかもし

んねえな。知らねえけど（とどこかへ）」

橋本「……」

賃貸チラシに書かれた文字。

『一人暮らしの社会人に最適！』

× × ×

不動産屋の窓から、中で座っている橋本が見える。

営業の田村孝弘（35）の話聞きながら、熱心に資料を見ている。

○サンライズコーポ府中・4階（夜）

橋本、上って来る。

泥酔し、寝ている島田。

橋本「（島田の肩を叩き）島田さん。おうちが待ってますよ」

島田、目を開け橋本をジッと見る。

島田「……はしもっちゃん、ほんとに引越すの」

橋本「検討してます」

島田「ふーん（とフラフラ立ち上がり）。飲みなおそ（千鳥足で危なっかしい）」

橋本「やめた方がいいですよ」

島田「いんだよ」

が、つまずき階段に手をつく。

橋本「（島田の肩を担ぎ）送ります」

島田「……」

○同・4階く6階までの階段（夜）

橋本、島田の肩を担いだまま、階段を上っている。

島田「……俺も引越そっかな」

橋本「引っ越したいんですか」

島田「あたりめえだろこんなところ。ま、金ねえし無理だけど」

橋本「40万円くらいでできますよ」

島田「……。そいやあの女の子、帰っちったまま？」

橋本「覚えてたんですね」

島田「（頷いて）ま、女ってそういうもんだよ。階段がやだー、とかそんな理由で出てっちゃうんだ。俺のカミさんもそうだったから、そういうもんだ」

橋本、納得したように、頷く。

島田「まったく」

橋本「あれ、でもさつき島田さんも引っ越したたって」

島田「まあな」

橋本「なんでですか」

島田「階段きちいもん」

橋本「……」

島田「いやでもだからってよお、出てくこと  
ねえじゃん？ 俺だって知らんかったも  
ん。不動産屋の兄ちゃん教えてくんなか  
ったし。ただ、こんな安くて良い物件な  
いですよー、奥さん喜びますよー、今決  
めないとすぐにでも埋まっちゃいますよ  
ーっつて」

橋本「まだ空いてますね」

島田「ずっとガラガラだよ。てかはしもっち  
やん、俺にカミさんいたって知ってたっ  
け」

橋本「今知りました」

島田「……堪ったもんじゃねえよ。良かれと  
思って契約してきたっつうのに、階段の  
せいで逃げられてよ」

橋本「やはり階段だったんですね」

島田「階段だよちきしょう」

○同・6階の廊下（夜）

上がってくる島田と橋本。

島田「あんがとあんがと（と離れる）」

橋本「おやすみなさい」

島田「おん」

階段を上ろうとする橋本。

島田「はしもっちゃん」

振り向く橋本。

島田「はしもっちゃんは、ここ気に入ってるわけ？」

橋本「まあ。広いし安いし、隣居ないですし」

島田「じゃあさ、やっぱ引っ越しやめちゃえば？」

橋本「え？」

島田「だっていいじゃんか。はしもっちゃん  
が満足してんなら」

橋本「（考えて）」

島田「……や、わりわり。うそ。今の忘れて。  
引っ越せんなら引っ越した方がいいよ。  
じゃお休みね（と601号室へ）」

○オフィスビル・前（日替わり・夕）

ダッシュで出てくる橋本。

サラリーマンたちを華麗にかわし、  
颯爽と走っていく。

○アパートA・2階の部屋（夕）

橋本、田村と共に内見。

6畳ワンルーム。

橋本、首を横に振る。

○アパートB・2階の部屋（夜）

橋本、浴室のドアを開けると、

かなり狭いユニットバス。

橋本、首を横に振る。

○アパートC・1階の部屋（夜）

歩道に面した大窓。

自転車に乗ったおじさんがこちら  
を見ながら通過。

橋本、首を横に振る。



○アパートD（3階建）の前（夜）

不動産会社の社用車から出てくる、  
橋本と田村。

田村「（疲れた様子で）ここの3階ですね」

橋本「エレベーターは」

田村「あ、いえ、ただ男性であれば問題なく」

橋本、首を横に振る。

○不動産会社（夜）

テーブルに座る、橋本と田村。

田村「ちよつとこの条件でとなると……、エ

リアを広げるしか」

橋本「分かりました」

田村「ではこちらで候補を探しますが、次回

はいつ頃が」

橋本「明日で」

○工事現場（夜）

仕事を終えた島田。

現場監督（男・40）、島田へ

現場監督「はいお疲れ（と給料を渡す）」

島田「（頭を何度も下げながら）実はちよつと金貯めてて、よければ仕事をも少し（と顔を上げるも）」

現場監督はもうどこかへ。

○帰り道・コンビニ近く（夜）

島田、疲れた様子で歩いている。

携帯電話（ガラケー）が鳴る。

メールを開くと、

【明日の現場無しになりました】

島田「……。やってらんね」

給料袋を握りしめ、コンビニへ。

○橋本の部屋（夜）

橋本、パソコンで賃貸住宅サイト  
を見ている。

橋本「（良さそうな物件を見つけ）あ」

すかさず『不動産 田村さん』へ  
電話。

○イタリアンレストラン（数日後）

川畑と水谷、ランチをしている。

水谷「うっそ！ ついに！？」

川畑「うん」

水谷「決め手は！？」

川畑「んー…、なりゆき？」

○Aハイツ・2階の部屋（夜）

内見に来ている橋本。

田村、必死で説明している。

橋本「（頷いて）ここにします」

田村「ほんとですか！ 良かったです！」

橋本、部屋を見ながら何度も頷く。

田村「（安堵して）やっと…」

橋本「…あ」

田村「何か気になるところでも…」

橋本「いや、あの、この度は本当にありがとう

うございました（と深々頭を下げる）」

○川畑の部屋・リビング（夜）

電気がついている。

川畑、ただいまー、と帰ってくる。

川畑「ちよっと」

川畑母、テレビ台の上に散らかった化粧品たちを整理している。

ゴミ袋に、いくつか容器が入っている。

川畑母「ごはん、ちよっと待ってね」

川畑「勝手なことしないで（と袋を取る）」

川畑母「（取り返して）こんな散らかして、  
愛想尽かされたらどうすんの」

川畑「ほんといいから」

川畑母「あ、今日美味しそうな饅頭屋見つけて  
買ってきたから、食べてみて」

テーブルの上に、饅頭の箱が二箱。

川畑母「彼にもあげなさいね」

川畑「余計なことしないでよ……」

川畑母「あと今日ね、近くの神社にも行って  
きたのよ。いいわねーあそこ。パワース

ポットっていうの？ 御朱印も貰っちゃ

って（と話し続ける）」

川畑の携帯電話が鳴る。

川畑「ごめん（と玄関へ）」

○同・玄関（夜）

川畑、電話に出ると、酔った様子の成川。

電話の先が騒がしい。

成川「（オフ）唯ちゃん何してる？ 仕事早く終わって飲んでんだけど、どう？」

川畑「どうって……。無理だよ、お母さん来てるから」

電話先で話し続ける成川。

川畑「……」

○同・リビング（夜）

川畑母、せっせと化粧品を整理している。

ごめんごめん、と戻ってくる川畑。

川畑母「あ、お母さん明日帰るから」

川畑「え？ 週末までいるんじゃないの？」

川畑母「用事あるのすっかり忘れててね」。

やだねえ」

川畑「……。せっかくだしゆっくりしていき  
なよ。銀座の資生堂パーラーとか、行か  
なくていいの？」

川畑母「いいのいいの。いつでも来れるから」

川畑「……」

せっせと続ける川畑母、化粧品を  
一つ手に取ると、

川畑母「なにこれベトベトじゃないのお！

（とゴミ袋へ）」

川畑「あ、それだめ！（とゴミ袋から取り出

し）これ高いんだよ（と手で拭い）」

川畑母の横に座る。

文句をこぼしながら続ける川畑母。

二人で整理。

川畑「……ねえ、私に結婚してほしいの？」

川畑母「えー？ まあ唯が幸せなら、なんで  
もええけどね」

川畑「でもなんで？ だってお母さんは」

川畑母「（被せて）いつか唯が寂しくなっ  
たら、嫌かろ」

川畑「……」

川畑母「で、孫はいつ見れるん（とふざけ  
る）」

川畑「やめてよもう（と笑う）」

○橋本の部屋・ベランダ（数日後・夕）

富士山が見える。

T「数日後」

○サンライズコーポ府中・4階（夜）

橋本、上って来る。

寝ている島田。

橋本「島田さん」

島田「おう、はしもつちゃん。ついに明日か」  
橋本「はい」

島田「（何度も頷いて、寂しそうに）やった

じゃん。色々ありがとね」

橋本「こちらこそ」

島田「（目を瞑って）はしもっちゃんと一杯やりたかったなあ」

島田の手には、開いたガラケー。

出て行った妻と島田のツーショット

ト写真。

橋本「（それを見て）じゃあ、今からでも」

島田、目を瞑ったまま答えない。

○橋本の部屋（日替わり）

段ボールが並ぶ、殺風景な部屋。

ピンポン、とインターホン。

○同・玄関

橋本、ドアを開けると、息を切ら

している引越し業者の作業員A

（40）と作業員B（22）。

作業員A「これ、お部屋の前に」



手には、カップ酒。

受け取る橋本。

『せんべつ』とマジックで書かれている。

○Aハイツ・前

2階建てのアパート。

引っ越し業者のトラックが走り去っていく。

○橋本の新居

1Kの室内。

段ボールと植物でいっぱいになっている。

その中に立っている橋本。

橋本「よし（と荷ほどきに取り掛かる）」  
が、置き場がない。

○電車（日替わり・朝）

満員の電車内。

人混みにつぶされている橋本。

○保険会社オフィス

川畑、デスクで仕事をしている。

橋本の声「川畑さん」

川畑、振り向くと、そこには真剣

な表情の橋本。

橋本「引っ越しました」

川畑「はい？」

橋本「あの家引っ越して、普通の部屋に引っ

越しました」

川畑「はあ」

橋本「どうぞでしょう」

橋本、川畑をジッと見ている。

川畑「あ、いや、ごめんなさい」

橋本「へ？」

川畑「いやあの……、お付き合いしている方

が、いますので」

橋本「……ええ？」

川畑「え？」

橋本「あれ。あの家、引っ越したんですけど」

川畑「……はい」

橋本「だめですかね」

川畑「そー、ですね……」

橋本「え。いや、すみません。僕てつきり。

え、ほんとですか」

川畑「ごめんなさい」

橋本、がくりと肩を落とし、愕然

とした表情。

周りの社員が見ている。

川畑「ちよつと橋本さん」

橋本、愕然としたまま。

川畑「お願いなんで顔上げてください」

橋本「（視線を落としたまま）何ですか……

……。僕引っ越しちゃったんですけど……」

川畑「……。いや私も、ちよつとは、ちよつ

とは申し訳ないと思ってますよ。あんな

風に帰って。でも、別にあの家だからと

かじゃなくてですね……」

橋本「（顔を上げ）違ったんですか」

川畑「いや、あの家だからってのもあったんですけど……」

橋本「そうじゃないですか」

川畑「（言葉を選んで）いや、なんて言うんだろ。橋本さんがいいなら、あの家もある家で良いと思いますよ。ただ……」

橋本「ただ何ですか」

川畑「なんていうか……。こんなこと私が言うのも変ですけど、橋本さん自身は素敵なところもあるし、そのまま、いいんだと思います、多分」

橋本「どういうことですか」

川畑「いや、えっとー。そう、あの階段。あの階段は、女性が上るには、すごく大変なんですよ」

橋本「やっぱそうじゃないですか」

川畑「いや、違って、なんていうか……」

橋本、川畑の言葉を待っている。

川畑「階段がというより……、橋本さんは、  
それを気にしてくれれば良かったんだと  
思います」

橋本「（目を丸くして）」

○新居の最寄り駅（夜）

改札から出てくる橋本。

雨が降っている。

橋本の前方、雨を気にしているス  
ーツ姿の男性。

傘を持った女性と息子が迎えに来  
る。

幸せそうに歩いていく三人。

橋本、彼らを見ている。

○橋本の新居（夜）

帰ってきた橋本（濡れている）、  
へこたれた様子で座る。

橋本「（気の抜けた様子で）……」

と、『せんべつ』と書かれたカッ

プ酒が目に入る。

○立ち飲み屋（夜）

カウンターで一人飲んでいる島田。  
酒が回っており、虚ろな目で肘を  
つき、だらしなく立っている。

成川の声「（大声で）いや／＼たまにはこうい  
う安いところもイイね！」

島田の後ろ、川畑と成川が飲んで  
いた。

酒が回っている成川、調子よく大  
声で話し続ける。

苦笑いの川畑。

成川「（近くの客へ）飲みます？ 奢ります  
よ？（と絡み始める）」

島田「（うるせえなあ）」

成川「（島田の肩を掴み）おじさんはどうで

島田「（振りほどき）うるしええなあ！」

成川「……。こうえく」

川畑「ちよつと……」

島田「（成川を睨んで）……。あ」

川畑「あ」

島田「……あなた、はしもっちゃんの！」

川畑「（やばっ）」

成川「？」

○サンライズコーポ府中までの道（夜）

橋本、雨の中走っている。

○同・4階（夜）

ダッシュで上ってくる橋本。

息を切らしている。

橋本「島田さん」

が、そこに島田の姿はない。

○同・6階（夜）

『601』のプレート。

インターホンを鳴らす橋本。

橋本「島田さん」

反応なし。

橋本「島田さん？」

反応なし。

橋本、諦めて帰っていく。

○立ち飲み屋・近く（夜）

橋本、雨の中歩いている。

と、前方から、

島田の声「んだよ調子乗りやがって！」

店員に店から追い出される島田

（泥酔）。

追って、店から出てくる成川。

成川「さつきから誰だよはしもっちゃんって」

島田「はしもっちゃんはなあ、俺の唯一のと

もだちなんだよ（と食らいつく）」

成川、島田を簡単に振り払う。

派手に倒される島田。

成川「（スーツの汚れを気にして）んだよこ

のきたねえおっさん」

橋本「島田さん！（と駆け寄る）」

橋本、膝をつき島田の肩を抱く。



頭を打ったようだ。

橋本「大丈夫ですか。しっかりしてください」

島田「……はしもっちゃん……？」

成川「でた。これがはしもっちゃん？」

島田「……あいつが、あんな奴がはしもっち

やんの……」

橋本、振り返って成川を見る。

見覚えはない。

見下した目で見ている成川。

と、川畑が店員に謝りながら出てくる。

川畑「（橋本を見て）……」

橋本「（川畑を見て）……」

成川「なに、知り合いなの？」

川畑「会社の……」

橋本「（川畑から目をそらし、島田へ）立てますか。いきましよう（と肩を担ぐ）」

泥酔の島田、ごめん、ごめんと呟いている。

橋本、島田を担ぎながら、雨の中

どうにか歩いていく。

成川「んだよあいつら。いこ」

川畑「（橋本らの後ろ姿を見て）……」

○サンライズコーポ府中までの道（夜）

雨に打たれながら、島田を担いで

歩く橋本。

と、横から傘。

川畑だ。

川畑「……さっきはごめんなさい」

橋本「……あ、いや。（川畑が濡れているこ

とに気づき）あの、傘」

川畑「（無視して）こっちですよね」

橋本「はい……」

○サンライズコーポ府中・エントランス（夜）

島田を担いで入ってくる橋本。

階段を上ろうとすると。

川畑「手伝います」

川畑、反対側から島田を担ぐ。

○同・6階 島田の部屋前（夜）

橋本「鍵、どこか分かりますか（と島田のポケットを探っている）」

川畑、ヒールを履いていない。

橋本「靴は」

川畑「一階に置いてきました」

○島田の部屋（夜）

部屋には、夫婦の写真。

布団に島田を寝かせる橋本。

島田の意識は回復しつつある。

川畑、離れたところで立っている。

島田「ごめんなあ」

橋本「……」

島田「なんで俺はこうなんだろ」

橋本「なんででしょうね」

島田「なんか、カッとなっちった。ごめん」

橋本「……気持ちはずれいですけど……、

あれは、良くないです」

島田「うん」

橋本「だって、あんなんじゃない、奥さんも帰ってきたいと思わないと思います。お酒は昔からなんですか」

島田「こんな増えたのは、ここに越して色々上手いかなくなってからだな」

橋本「わかんないですけど、今の島田さんじゃ、帰ってきたくても帰ってこれないと思います。このマンションとかそういうこと以前に」

川畑、橋本を見ている。

島田「……」

橋本「お酒、少し控えた方が良いと思います。忠告します。友達として」

島田「……ありがとう」

橋本「もしいつか、引っ越す時が来たら言ってください。僕、物凄く辛抱強い不動産の人知ってるので」

島田「（笑みを浮かべ）そんな人なんだ」

橋本「いたんですよ」

島田「へへへ。ありがとね」

橋本「じゃ、帰ります（と立ち上がる）」

島田も、橋本と川畑を送ろうと立

ち上がる。

橋本「いいですよ」

島田「いんだいんだ。麦茶作るから」

橋本「麦茶？」

島田「いや昔よ、俺が何の気なしに麦茶作る

だけで、（写真を指し）あいつやけに喜

んでくれてたんだよ。なんかそれ思い出

してね」

○府中けやき並木通りく府中駅（夜）

イルミネーション。

雨がやんでいる。

並んで歩く橋本と川畑。

橋本「今日は、ありがとうございました」

川畑「……ここ歩くの、久しぶりですね」

橋本「そうですね」

川畑「あの」

橋本「はい」

川畑「結婚生活とか、理想の結婚相手って何か、私よくわからなかったんですけど」

橋本「……」

川畑「私の親、小さいころに離婚してて」

橋本「（黙って聞いている）」

川畑「すみません。変な話して」

橋本「続けてください。聞きたいです」

川畑「……でも今日、最後島田さん？の話を

聞いて、なんとなく、少し分かったような気がしました。なんていうか、女性の扱いに慣れてるとか、常に頼りがいがあるとかじゃなくても、無くなった麦茶を気づいた時に作っておいてくれるような、そんな関係性でいてくれる人って、素敵だなんて。そういう生活って良いなって、勝手に思いました」

橋本「……」

川畑「もしかしたら島田さんの前の人も、島田さんのそういうところに惹かれてたのかなって……」

橋本「（小さく頷く）」

川畑「……橋本さんは、私のどこが良いと思ってくれてたんですか？」

橋本「（考えて）……顔面？」

川畑「は？」

橋本「笑顔が素敵です」

川畑「……最初からそう言ってくれればいいじゃないですか」

橋本「いや、でも、それしか知りません。も

っと、川畑さんのことが知りたいです」

川畑「（顔を赤らめ）。前に、橋本さんは変わってるって言ったこと覚えてます？」

橋本「はい」

川畑「橋本さんは、変わってる、優しい人だつてことも、今日分かりました」

橋本、顔を赤らめる。

駅に着く二人。

改札を通り抜ける。

言葉を交わし、互いに反対のホームへと歩く。

○サンライズコーポ府中・前（数日後）

引越しのトラックが止まっている。

○トラックの中

運転席に座っている、荷下ろし後の作業員A。くたびれている。

作業員B、トラックに乗り込んでくる。

作業員A「二回も引越して、変な人だよな」

作業員B「（笑って）でも、今回差し入れくれ  
れましたよ」

作業員A「おう。え！？　こんなに！？」

二人、笑う。

ビニール袋に入った、大量のお菓子と飲み物。



○保険会社オフィス（日替わり・夕）

時計が17時半を指す。

いつも通り、テキパキと片付ける

橋本。

リュックを背負い――

橋本「……お先、失礼します」

驚く周りの社員達。

少しして、

川畑の声「おつかれさままでーす」

社員達「（ぱらぱらと）おつかれさまです」

橋本、会社から出ていく。

上司（55）「あいつ、なんかあったんじや

ねえか？」

社員達、首を傾げる。

川畑、笑みを浮かべている。

川畑の足元、スニーカー。

○一軒家の前（夜）

歩いているサラリーマン、一軒家  
へ入って行く。

手には洋菓子の紙箱を持っていた。

○マンションAの前（夜）

外から、エレベーターを待つ親子  
が見える。

二人、笑顔で話していた。

○サンライズコーポ府中・3階までの階段  
（夜）

住人A、しんどそうに重そうな買  
い物袋を持って上っている。

○同・3階の廊下（夜）

住人A、誰かに感謝をして部屋へ  
と帰る。

○島田の部屋・前（夜）

誰か（橋本）がインターホンを押  
す。

○同・中（夜）

丸テーブルの上、ぐつぐつ煮込んでいる鍋。

座っている橋本。

橋本「島田さん、お酒いつぶりですか」

台所で、ご機嫌そうに野菜を切っている島田。

島田「えー？」

橋本「飲んでますね」

島田「いや、ちよつとよ？ 毎日一杯だけ！」

橋本「毎日……」

島田、野菜がたくさん入ったボウルを持ってくる。

橋本「こんなに食べれないですよ」

島田「いいじゃないの（と台所に戻る）」

橋本、鍋の蓋を開け、火加減調整。

島田、缶ビールを持って来て、

島田「まずはビールでいいよね（と橋本の前に置き）、今日は奮発して発泡酒じゃないから。本物のビールだから（と座る）。

あと日本酒もあるから、もうじゃんじゃ  
んいっちゃおう」

橋本、島田を見る。

島田「いいじゃん今日は」

橋本「まあいいですけど」

鍋に手を出さない二人。

島田「先、食べちゃう？」

橋本「待ちましょう」

ピンポーン、とインターホン。

橋本、すぐに迎えに行く。

島田、ニコニコとその様子を見て

いる。

戻ってくる橋本。

後ろから、川畑。

川畑「その節は、すみませんでした」

島田「（立ち上がり）やめてよ。あの彼とは、

大丈夫？」

川畑「別れました」

島田「ええ！？」

川畑「全然いいんです。逆に良かったんで」

島田「（申し訳なさそうに）……。え、じゃ

あもしかして……。 （と橋本を見る）」

川畑「まさか。そんなんじゃないです」

橋本「……。これ、川畑さんから」

手には芋焼酎。

島田「おーありがと。ま、とりあえず座つて座つて。あ、ビールでいい？」

川畑「いや、これ（焼酎）水割りで」

島田「おっけおっけ（とまた台所へ）」

島田、グラスと氷を用意している。  
並んで座る、橋本と川畑。

川畑「（缶ビールを見て）あれ、今日はビールなんですわね」

橋本「まあ今日は、流れ的に。もう慣れました？ 階段」

川畑「慣れる訳ないじゃないですか。めっちゃくちや疲れしましたよ。なんでせめて橋本さんのとこじゃないんですか」

橋本「片づけが終わってなくて」

島田「（グラスを手に戻ってきて）始めよ始めよ」

三人、酒を手に。

島田「（橋本へ）じゃ主賓から乾杯の挨拶を」  
橋本「え？」

川畑「橋本さん、早く」

橋本「……。これからは、7階ではなく4階の橋本として、よろしくお願いします。」

乾杯」

島田と川畑「かんぱーい」

三人、飲む。

島田「（小さく）いやあ羨ましいっ」

川畑「（ボソツと）4階でも辛いですけどね」

橋本、嬉しそうに小さく笑う。

おわり